10. 三歳児健診で検出された滲出性中耳炎児の予後

高橋由紀子*1　小林　俊光*1　豊嶋　勝*2　高坂　知節*1
金子　豊*3　堀　克孝*3　沖津　卓二*4　永渕　正昭*5

1．はじめに

宮城県では，従来より用いてきた独自の耳科専用アンケートにティンパノメトリーを加えた三歳児聴覚健診を，仙台市では平成３年１月より，仙台市以外では同５月より開始した。

これまで我々は本検診が三歳児における滲出性中耳炎を含む聴力・言語異常の検出に効率的なシステムであることを報告してきたが，今回は本検診で検出された滲出性中耳炎児の予後調査を行ったのでその結果を報告する。

2．対象と方法

対象は宮城県内で三歳児健診を受診し，その結果平成４年12月から平成５年11月にかけて耳鼻科専門医による診察で滲出性中耳炎と診察された三歳児である。

三歳児健診では母親にアンケートを記入してもらった後にティンパノメトリー(リオンRS31)を行い，その結果で耳鼻科専門医受診を通知した。耳鼻科専門医受診結果は診察医に記入してもらい，葉書にて回収した。滲出性中耳炎と診断された患児に関しては，フローチャート(図１)に従い診察医に「予後調査票」を送付し，

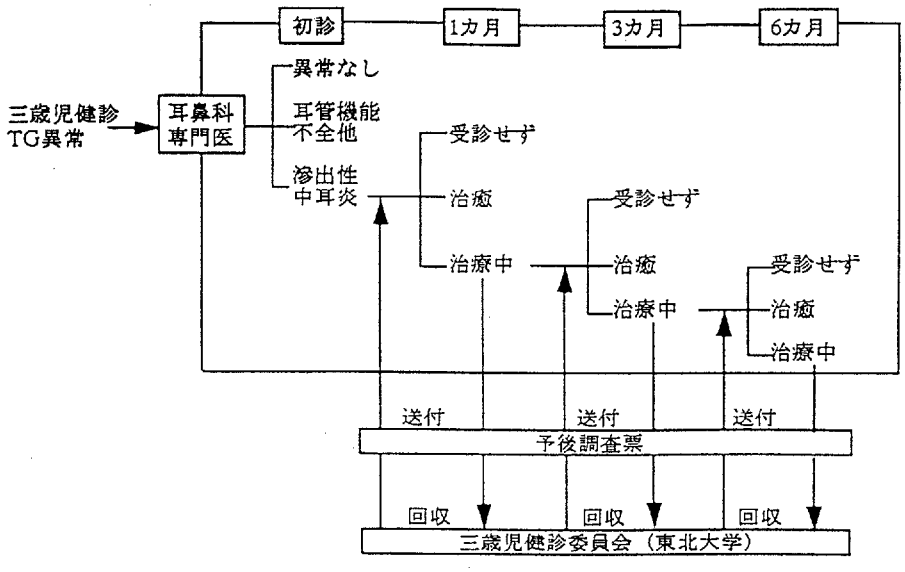

図１　滲出性中耳炎予後調査のフローチャート

*1東北大学医学部耳鼻咽喉科　*2磐城共立病院　*3仙台市　*4仙台市立病院　*5東北大学教育学部

6ヵ月までの予後調査を行った。なお健診におけるティンパノメトリー(以下TG)異常は次の4項目いずれかにあたるものとした。

1) B型

2) C_2型：ピーク圧が−200daPa以下。ただし−200daPaにおけるコンプライアンス値が0.3ml(急性中耳炎既往のある場合は0.35ml)を超えるものは除外した。

3) 外耳道容積が2.0ml以上

4) 静的コンプライアンス値が0.1ml以下

3. 結　　果

平成5年11月までの予後調査票送付数は644名であった(図2)。このうち不明，受診せずを除いた1ヵ月追跡可能例は414名618耳でその内訳は治癒124名185耳(30%)，治療中290名433耳(70%)だった。フローチャートに従い，1ヵ月時点で治療中の患児のうち．3ヵ月追跡可能例は166名259耳で，治癒36名56耳(22%)，治療中130名193耳(78%)だった。同様に，3ヵ月時点で治療中の患児のうち，6ヵ月追跡可能例は61名95耳で，治癒18名28耳(29%)，治療中43名67耳(71%)だった。

一方，この間に23耳が鼓膜切開を，10耳が中耳換気チューブ留置術を施行されている。

次にティンパノグラム型の推移をみた(表1)。848耳の耳鼻科専門医初診時のTG型は，B；549耳(65%)，C_2；269耳(32%)だった。6ヵ月時点でまだ耳鼻科通院中の症例におけるTGの型別割合ならびにそれらの症例でのTGの推移をみたのが表2である。初診時はB型が78耳(86%)を占めていたが，治療に伴いB型の割合は

表1　耳鼻科専門医初診時のTG型

TG型	B	C_2	C_1	A	計
耳数 (%)	549 (65)	269 (32)	28 (3.3)	2 (0.2)	848 (100)

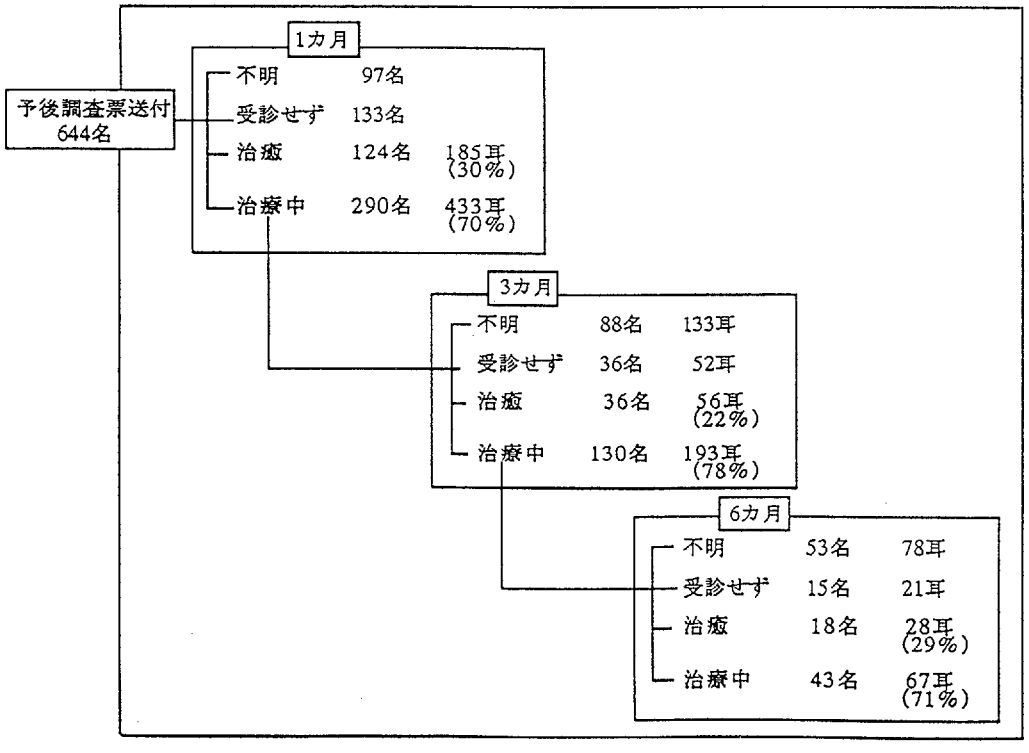

図2　調査票集計結果

表2　6カ月経過例のTG型（手術例を除く）

TG型	AまたはC1	C2	B	不明	計 耳数(%)
初診時	1 (1.0)	12 (13)	78 (86)	0	91 (100)
1カ月	10 (11)	24 (26)	38 (42)	19 (21)	91 (100)
3カ月	37 (41)	17 (19)	27 (30)	10 (11)	91 (100)
6カ月	45 (50)	13 (14)	21 (23)	12 (13)	91 (100)

手術例：鼓膜切開　23耳，換気チューブ留置　10耳

減少し，6ヵ月の時点でAまたはC1型が45耳(50%)と改善したが，なおB型21耳(23%)を認めた。

4．考　　察

今回は三歳児健診で滲出性中耳炎と診断された644名に関して予後調査を行った。本県では平成4年度に健診児の5.7%が滲出性中耳炎と診断されている。予後調査集計結果をみると，診察医に調査票を送付するという方式のため，脱落例が多かった。しかし見方によっては，これが三歳児健診後の滲出性中耳炎をはじめとする中耳疾患の治療の現況を表わすと共に問題点も浮き彫りにしている。滲出性中耳炎は無自覚な症例が多いということも治療の継続を困難にしている一因かと考えられる。

予後に関しては今回の結果で，もし脱落例における治癒率が追跡可能例と同様であると仮定すると，3ヵ月の時点での要治療耳は0.7×0.78＝55%，6ヵ月では0.55×0.71＝39%であろうと予想される。一方，追跡例より3ヵ月で130名，6ヵ月で43名が治療中であることが確認されているので，3ヵ月で130/644＝20%，6ヵ月で43/644＝6.7%となり，実際には両者の間，つまり3ヵ月での要治療例は20～55%，6ヵ月では6.7～39%の間と考えられる。

次に6ヵ月追跡例でのティンパノグラム型の推移をみた。初診時，B型は68%を占めていたが，治療の結果，6ヵ月時点で50%がA，またはC1型を示すまでに改善した。しかし6ヵ月の治療にもかかわらず，依然としてB型も21耳(23%)存在しており，将来様々な中耳疾患に発展する可能性のあるこのような難治例の検出，治療は今後の課題であると思われる。

5．ま　と　め

平成4年12月から平成5年11月にかけて宮城県内で三歳児検診を受診し，滲出性中耳炎と診断された患児のうち，644名の予後調査を行った。

追跡可能例の1ヵ月以内の治癒率は30%，1ヵ月時点での治療中の症例の3ヵ月以内の治癒率は22%，3ヵ月時点での治療中の症例の6ヵ月以内の治癒率は29%だった。

今回の結果は診察医に調査票を送付するという方式のために脱落例が多いが，三歳児健診後の滲出性中耳炎をはじめとする中耳疾患の治療の現況を表わしていると言える。今後さらに滲出性中耳炎児の予後の全体像を把握するために，新たな方法での調査の継続を検討している。

参考文献

1）小林俊光，豊嶋　勝，石戸谷雅子，高橋由紀子，高坂知節，金子　豊，堀　克孝，沖津卓二，荒井英爾，永渕正昭：三歳児聴覚健診における異常率と事後措置。平成4年度厚生省心身障害研究「視聴覚障害児の早期発見療育システムに関する研究」研究報告書，66-72，1993

2）豊嶋　勝，小林俊光，石戸谷雅子，高坂知節，金子　豊，堀　克孝，沖津卓二，永渕正昭：仙台における三歳児健診の現況。Audiol Japan，**35**，120-126，1992

3）高橋由紀子，豊嶋　勝，小林俊光，高坂知節，金子　豊，堀　克孝，沖津卓二，荒井英爾，永渕正昭：三歳児における滲出性中耳炎児の予後。Audiol Japan，**36**，177-178，1993

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

1.はじめに

宮城県では,従来より用いてきた独自の耳科専用アンケートにティンパノメトリーを加えた三歳児聴覚健診を,仙台市では平成3年1月より,仙台市以外では同5月より開始した。これまで我々は本検診が三歳児における滲出性中耳炎を含む聴力・言語異常の検出に効率的なシステムであることを報告してきたが,今回は本検診で検出された滲出性中耳炎児の予後調査を行ったのでその結果を報告する。